
wishful thinking

ik_brtr

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W i s h f u l t h i n k i n g

【コード】

N 9 5 6 5 0

【作者名】

i k | b r t r

【あらすじ】

新劇場版エヴァ、その後のお話。もしの子供達が高校生になったら妄想。当然ながら最終話が公開されたら、矛盾が生じると思われます。ご了承ください。

1 (前書き)

*最終話が公開されたら、矛盾が生じると思われます。ご了承ください。
* *

*何の脈絡もなく、子供達は高校生になり、大人達はその分年を取っています。
* *

ゆさゆさと肩が揺さぶられる。

「起きて、アスカ」

ゆさゆさと意識が揺さぶられる。

「遅刻、するから」

あ、そうだった今日日直だった。

「アスカ、……起きてる？」

「あー……いあいおはよ」

「うん。おはよ」

遮光カーテンの裾から、太陽光が入り込もうとしている。おはよう世界。あたしはまだねむい。

もうばつちり制服を着てるレイは私起きたのを確認すると、ドレスサーに向かつて髪をとかしだした。初めて会った（見た？）時は随分さっぱりとした色気のないショートだったけど、今ではもう肩より大分下まで伸びた。アルビノらしいプラチナがふわふわと揺れている。ネコヤナギみたいだ。

昔は短くて誰も気付かなかったが、伸ばすと緩やかにくるりと毛先にカーブが付いていた。あたしはその淑やかさを「いいな」と言っただけど、レイはあたしの毛先を指に巻いて顔を真っ赤にして「……まっすぐな方がいい」と呟いた。あたしだって純粋な日本人みたい

なまつすぐ髪じゃないんだけど。頭頂部の髪の毛の根元に、すこしだけうねりがある。ちなみにこれは髪を切ってから判明した事。長い時には髪の重さで伸びていただけらしい。レイみたいに毛先に癖があるだけならかわいいのに。

どうやっても噛み合ないし、仲が良くはなれなかつたあたしたちが、あの瞬間仲良くなった。友達になれたんだと思う。少なくともあの瞬間から、あたしの中の順位はレイが1位になった。レイ最優先。一番だいじ。

「…アスカ」

「んあ？あら可愛いじゃない」

「そ、かな」

「はいはいとりあえず背筋ピンて」

鏡で後頭部を見ようと、レイが左右に揺れる。今日は頭の上側の髪だけを、随分前にあたしがあげた赤いリボンで結んでいる。エヴァに乗らなくなつてから、レイはすつと背が伸びた。あたしはちんちくりん、全然伸びない。うらやましい。性格は『無愛想』から『極度の人見知り』位には良くなつたけど、その分猫背がひどい。もつたない。高くなつた身長と、整つて浮世離れた顔、目だつ髪、けっこういいかんじの体つき（この言い方をしたらヒカリに「アスカって、中身は本格的におっさんだよ」と真顔で言われた）、何より『エヴァの元パイロット』という物珍しさでじろじろ見られるうちにどんどん萎縮して猫背になった。日本的といえば日本的なんだろうけど、もつたない。

そついや、うちの駅の前にかわいい店がやつと出来たので（ネルフの方まで行けばそれなりに店はあつたけど可愛い小物屋とか、クレイプとアイスの店とか、そんなのはないし）こないだの放課後にあたとレイと、ヒカリと行ってきた。細々としたかわいらしい小物がキラキラ所狭しと並んでいて、結局3人で色違いでお揃いの細身

の革ベルトの時計を買った後、ヒカリとあたしで『レイの高校デビュー記念』にキラキラよく光る、でもちよつと大人っぽいペンダントをあげた。シンプルに少し薄い青の宝石が付いただけのトップだけど、使い回しがきくと思って。

鎖が細いので日常的にも使えるし、日本の高校にダンスパーティーがあるのかはわからないけど、そのくらいなら申し分ない感じ。レイは「お守りだから」と言って、普段から制服の下につけてくれる。

妹はいないからわかんないけど、いきなり妹が出来たみたいで毎日が楽しかった。レイは世間知らずというか、ごくごく当たり前の様な事がぼこつとぬけおちてて、それを埋めたり埋めなかったり（最近は「なんかおかしい事したら、言って」と言われるが、まあ教えたり教えなかったり）、笑ったりからかったりつついたりするのがたのしくてしょうがない。

二人とももうどうしようもなくシンジが好きだって、二人ともわかってる。それについて何か言う事もないし、ただだからどうだっ
て感じでもなく、出し抜くわけでもなく（あたしは出し抜かれてい
いんだけど。さつさと付き合えアンタ達、と思う）日々が穏やかに過ぎていく。

「アスカ、髪」

「うわー」

ぐしゃぐしゃというかもウキミみたいだ。あたし別にパンクの人じゃないんだから、おっ立てなくていいのに。寝癖直しのミストをがしがし振りかける。レイが目だけ笑ってる。口はおちょぼ口。我慢してる。この頑固な癖毛め。ミストで髪がべったりするまでかけないと、脱パンクの人はむずかしい。でももう、髪を伸ばす気にはなれない。

エヴァに乗らなくなつてから、レイは髪を伸ばして、あたしは髪を切った。自分が思つてた以上に、あたしは『エヴァにのること』に固執してたらしい。何かはじめをつけたかった。エヴァが凍結された日、多分人生で一番寂しかった。失恋じゃないけど。

その日は気を使つてくれたのか、事後処理で忙しいだろうにミサトも早く帰つてきた。

ヨーロッパのとは少しばかり風味の違うビールを水代わりに、棚の奥に押しやられていたレトルトをつまみにミサトにぽつぽつと話してたら、髪を切るうみたいになつた。どうしてそうなるのかはわかんないが大人つてのはミサト曰くそういうもんらしい。失恋じゃないつて言つてんのに。流星に不器用な上にぐでんぐでんの酔つ払いのミサトに切つてもらつのは怖かつたし、自分で切るうにも後ろは見えないし、シンジを叩き起こして切つてもらつた。星がきれいな夜だった。

「なんで、俺なの」

と言いながらも、さつきまで寝てたとは思えない程リズムミカルにはさみが動く。声がかすれてる。一番傷ついてないのは多分シンジだとおもつ。ベランダの床に、少しずつ髪が落ちていく。昔のレイよ、りちよつと長いくらいにしてもらつ。いつもの夜だ。暗くて静かな、いつもの夜だ。いい夜だ。

「あんたが一番器用じゃない」

「…そうかもしれないけど」

「あんたの指とセンスと実力とその他もろもろは信頼してらつて」とよ

「……………」

こいつはレイが好きだから、あたしの信頼なんか不本意だろうけど。

さっさとレイとくっつけばいいのに、何故かいろんな人に遠慮して未だにだんまりだ。そのいろんな人々から、いい加減くっつけと思われているのに。中学の時は、転校早々のあたしと否応無しに夫婦扱いされてしまったので、高校にあがってからはなるべくシンジには寄りつかないようにしていた。そんなとこまでセット扱いされて、シンジの自由を奪うのはごめんだ。「碇君も式波さんもエヴァに乗ってたんでしょ？」なんて不躰な質問には、日本に来てから体得した曖昧な笑みと、「部署が違うからあんまり……」なんて的外れな答えで遠ざけた。別に嘘は言っちゃいない。当時はまだユー口空軍に籍置いたままだったし。

そもそもネルフの監視がべったりつかないのであれば、あたしは空軍に帰ろうと思ってた。が、ネルフ自体が日本の国家機密の固まりみたいなもんだから、他所、特にユー口空軍になんかありんこ一匹レベルで口外されたくないらしい。あつちに帰って軍に復帰しても、来日前と同じ待遇ならともかく、流石に軍隊あがりみたいなのに毎日監視されるのはイヤだから、監視の話が出た時点で条件は提示しただけおとなしくこっちの高校に入ることにした。向こうもあっさり飲んでくれたので、話はすぐにまとまった。

条件は一つだけ。ミサトの家を出て、綾波レイと同居する事の許可。流石に、『あきらめたけど好きな男』に対して、学校では関わらないけど家に帰れば顔つき会わせてるのはしんどい。監視されながら一人暮らしもしんどいっていうか絶対夜なんかないちゃうからそれを監視に見られるのはしんどい。そのときふつと、レイが思い浮かんだ。なんか泣けた。

レイはレイで、ネルフを解体しようとして来た人たちは処遇がどうなのか、奇妙な少女をどう扱うにすればいいのか、そもそ

も人権があるのかないのかほとほと困っていたらしい。英雄か、許されない実験の産物か。そこにあたしが条件を出した。やって来た人たちは、二人一緒なら監視の目も少なくて済むし、なにより余計な波風を立てる事も無いと判断し……たかどつかはあたしの推測だけど、晴れてレイとの二人暮らしが始まった。

とりあえずレイの部屋は引き払った。引越しの手伝いで最後に一度だけ行ったけど何だあの部屋。家具も小間物も経費で落とせるといふから、レイが使っていた家具なんかはほとんど置いていかせた。

「あんだねえ、こんなほこりっぽいところでそんな壊れかけなんか使う事無いわよ」

「……まだ、使える」

「骨が折れたベッドは使えるとは言わないのよ。買ってくれるってむこうが言うんだから、もっと可愛いの揃えましょ」

「かわいい？」

言葉の意味が分からないのか、『かわいい』を口の中でころころ転がしている。

ちなみにレイのベッドは鉄パイプが腐蝕したのか、足が一本折れ曲がっていた。三本は無事だから寝られない事は無いが、そういうのは壊れたといつていいとおもっ。

「可愛いのもなんでもいいわよ。なんなら見立ててあげるわ。」

「……」

「あなたが気に入るやつ、さがしましょ。さ、いい」

「……うん」

中学校指定のもうすぐ使わなくなる鞆に、小間物と服を詰めて、それで終わった。

それから、レイはずっとこっちにいる。

あわあわしながらもあつと言う間に制服着て、朝ご飯は…いいや、中休みに食堂いこ。

「ー口じゃちよつと考えられないくらい、びっくりするくらい軽い革靴を履こうとしたら、後ろから食パンくわえたレイもついてきた。

「あんた日直じゃないでしょ」

「アスカと一緒に、いく」

どうでもいいけどこの子、なんで素の食パンそのまんま食べれるんだろう。

昔はほとんど何も食べられなかったけど（この部屋に来た初日はまだ薬をざらざら飲んでたけど、最近ほぼ飲んでいない。初日に食堂の夕飯食いつぱぐれたあたしがコンビニのゼリー食べてるのを見て、欲しそうだったからちよつとあげた。消化器官がほぼ使われてなかったからかまだ消化のいい物しか食べられないけど。）最近はずいぶん食べるようになってきた。赤城博士曰く『以前は食べたいとも思わなかったけれど今は違う。欲求は人を変えるのよ、科学の力なんか思いも寄らないくらいに。』だそうだ。そんなもんだろうか？

今日のレイは大荷物だ。

「今日アンタ帰りは？」

「ん、今日はなんにもない」

「あれ、そうなの？荷物多いけど」

「授業で、使うの。今日からテニス、やるから。」

ああ、そうだ前半クラスは後期からテニスだ。

この残暑厳しい中でテニスはちよつとごめん被りたい。でもあたし

は後半クラスだから、後期（というか年末）にプールだ。髪きつたからまだ良いけど、それでもどっちもどっちだな、うまくいかないな。

「あそ、日焼け止め欲しけりゃ取りにきなよ」

「うん。休み時間に行く。帰り、一緒に。」

「あたし今日日直だから、迎えにきてよ」

ぱつと顔が明るくなる。アンタ食パン落とすわよ。

レイの殺風景な家に居候するようになってから、例えばそれ取ってとか、あれどこだっけとか聞くと、ぱつと顔が明るくなる事に気がついた。昔はそんなこと無かったと思うんだけど。

「・・・うん！」

「ていうかあんた、マイラケット持ってたのね」

担いだスポーツバックは、ラケットの形にふくれている。

この子そんなにスポーツ好きだったかしら？運動出来ないわけじゃないのは知ってるけど。

「伊吹二尉がくれたの。」

「・・・はあ」

「大学で、やってたけど新品だから、て」

まあ確かに、あのネルフの中じゃ断トツで、テニスサークルとか入りそうではあるけど。

しかしそんなのがあるんなら貸してくれても良かったじゃないかと思っただが、いかんせん片目では球技がびっくりする程やりづらい。

当然ながら結果は散々だった（さすがに目のことがあるから成績に響きはしないだろうけど）。それでマイラケットなんて持ってた

日には惨めにも程があるから、やっぱりいらなかったわね、うん。

まだ玄関には人気がない。運動部達の朝練もそろそろ終わるだろうから、今だけの静寂だとは思っけど。

「じゃ、あたし職員室行くから」

「うん。・・・あとでね」

白い髪をふわりとゆらして、レイは階段を上っていった。
一日が、はじまる。

1 (後書き)

つぎからおとこのののターン。

2 (前書き)

*最終話が公開されたら、矛盾が生じると思われます。ご了承ください。
* *

*何の脈絡もなく、子供達は高校生になり、大人達はその分年を取っています。
* *

*何の前触れもなくカヲル君が片思いなホモの子です。苦手な方は
* ご注意ください。 *

シンジ君は、変わった。

ファーストも、変わった。

セカンドは、…どうだろう。接点がありませんからわかんない。

僕は、特に何も変わらない。いつまでもかわれない。

ファーストとセカンドが同居する事を決め、同居について主にセカンドが上層部に力づくでYESと言わせ（本人達にそのつもりはないようだが、あれは脅迫だ。だれがそうみてもそうだ。）、葛城さんの部屋からセカンドが出て行き、さてこれは傷心のシンジ君を慰める為に開いた部屋に僕が完全に転がり込もうフラグですよねそうですねきやつきゃうふふが待ってるんですよ保護者公認のもとこんどこそシンジ君だけはべたべたであまあまな青春ライフを僕と過ごせるんですよと思ってシンジ君の布団でゴロゴロしつつ胸を熱くしていた矢先、葛城さんから、あらたまつて加地さんと結婚するにあたり、この部屋を引き払うという話をされた。ちなみに最近シンジ君は僕の行動を止めない。白い目で見てくれればいい方。概ね目もくれない。セカンドが出て行って1週間、この家で僕に暖かい視線を送ってくれるのは酒を飲む前の葛城さんだけである。次点ペンペン。

結婚があ、リリンのそういうなんていうかちょっと心のあつたまる文化好きだよ僕。まあシンジ君と現状じゃ結婚出来ないのが残念だけどしょうがないや。しかし加地さんねえ。焼けばつにくいに、てことなのかな？なんてモゴモゴ考えてたのもつかの間、そうするとシンジ君と僕の行き場がなくなってしまう。高校の寮はもうとうに募集を締め切っている。途方に暮れていると、加地さんが遅れてやって来た。加地さんはいい人だ。僕のこの恋心を純粋に応援してくれてるのは今の所加地さんだけだ。（葛城さんに相談したら、『君が

使徒か人間かは置いておいて、同性同士、しかも相手は朴念仁のシンジ君。レイモアスカも狙ってるわけだし、難しいと思うけどまあ飲めよいいから飲めよ』というありがたい言葉を頂いた。」

「まあ急いでないし、どこか部屋を探すんなら俺も葛城も保証人になるし。」

「でももう何週間もしたら高校でしょ？授業始まったら、なかなか大変だし……」

「そうなんですよね、でもそんなにすぐにはいい物件見つからないですよ」

「あ、じゃ俺の部屋使うか？物置にしかしてないけど、まあそこは勝手に使ってくれてかまわないさ。」

「それも悪いです。……でも、他に方法はなさそうですよね」

ああああ困った顔も可愛いよシンジ君あああああ。

「俺と葛城の都合で言ってるんだ。その位はどーんと甘えてくれよ。」

「じゃあ、お言葉に甘えて、使わせてもらいます。……一人暮らし、結局初めてだから緊張するな……」

ガタつと椅子から崩れた。何とも言えないもうすぐ夫婦の同情の視線が二つ。

シンジ君？こつち見てもくれなかったよバーカバーカ！でも好き！愛してる！

結局次の日から荷物を詰め出して（散々いいような扱いされてたけど、荷造りと大掃除に駆り出された。）一週間で片付けて葛城さんの部屋を出た。シンジ君はちよつと泣いてたけど、見なかった事にした。

加地さんの部屋はすでに少しずつ荷物を運んでたからそこまででは

なかったが、それでも随分殺風景で、これをシンジ君と僕の愛の巢にするんだ、絶対幸せにするんだ、と心に誓った。が。

ともかくにもシンジ君はもう見た目から変わってしまった。これが今のところ目下の大問題で、まず会ったときはガリガリで細くって華奢でいかにも愛らしい少年だったのに、今じゃ腹筋割れてる。蟹腹。マツチヨではないけど細マツチヨ。部屋帰ってきてからも腹筋背筋してるし。長椅子に上体寝かせてなんか持ち上げてるし。プロテイン部屋に常備だし。ちなみにシンジ君はあのいまましい関西弁に誘われてラグビー部に入った。僕はオケ行こうって言ったのに。せつかくチェロできるのに。シンジ君も最初はオケ入る気だったのに、トンビに油揚げどころじゃない。

そうだあともう首が太い。頬と同じ幅で生えてる首が太い。昔は後ろから首に腕回してぴつとりくつついて、頬の一つも撫でたら妖しい感じを醸し出せたのに、今じゃこどものおんぶだ。なんとというか『遊んでー』状態だ。こないだおんぶ状態のまま背負われて、シンジ君の首が締まることもなくそのまま部屋の中をうろろるされた。きつちり立ったら、僕の足は床から大分離れてた。

ない。これはない。耽美の欠片もない。

もうこれは僕の体は14で止まってんじゃないかと思って、葛城さんに頼み込んで、最終的に回収されて地下で飲み過ぎた次の日のおやじのごとくくたばってるアダム本体に会わせてもらい、聞いた。

『あのさあ、僕14で体止まってるよね？』

『は？』

『いや背が伸びないし』

『カルシウムとってないからじゃねえの』

『馬鹿言わないでよ』

『いや、だって普通に成長してるし。伸びてるよ身長。』

『は？』

『5mm』

『……………』

『ま、個体差だ個体差。個性個性。ゼルエルがきもいのも、サキエルがかわいいのも、ラミエルが青いのも、サハクィエルがひらひらなのも、お前がちびなのも個性個性。』

『ふざけんな何とかしろ』

『えーそんなのおまえ自力で何とかしろよ。あ、ゼルエルに伸ばしてもらえよ頭と足もってぐいっと』

もう話しても埒があかない。葛城さんに五体投地をお願いした僕のこの悲しさはどこ行けばいいの。

玄関がなにやら騒がしい。

「ただいまー」

「あつ、あ、あ、お、おかえりシンジ君」

「お邪魔します」

「邪魔すんでー」

げ、なんかムサいのが来た。ちよ、敷居またぐな、入るな、汗くさ、ちよ、シンジ君意外の野郎の汗とかマジ勘弁なんだけど！？

「相変わらず綺麗にしてんのね 안타」

「…お邪魔、します」

ちよつとまってなんでファーストとセカンドも

っていつかこの部屋で僕より背が低いの、セカンドだけなんだけど

「うん、……楽しい。」

「もー綾波はかわええなーわしわししてまうでー」

シンジ君をムキムキにした張本人が、こんどはファーストの頭をわしわしというよりはがしがし撫で始めた。いいよもうファースト落としちまえよこの筋肉。しかもファーストもキャッキヤと幼女のように喜んでいいる。シンジ君はスルー。……喜んでいいんだよね？

「シンジ、台所借りるよ。飲み物入れてくる」

「あ、手伝うわよ」

「式波は座つててよ。何がいい？」

「……何があるかわかんないし、いくわよ」

シンジ君に構って欲しそうな視線を投げるファーストと、気づきもしないシンジ君。筋肉はセカンドとメガネの視線に気づくとおっさんくさく立ち上がった。

「せやなー俺も見に行くわ。あ、お前らなにがええ？」

「冷蔵庫に麦茶入ってるから、僕はそれで」

「あ、わたしも」

「僕も」

「あーいよっ。」

『あんたのすべき事はたった一つよ。解ってるわね』

セカンドと筋肉、そして眼鏡は気をきかせて台所へ立った。

……セカンド様、視線で命令されても僕どうしたらいいか解りません。……あっごめんなさいごめんなさい

「あれーおかしいなー。綾波、そのへんにリモコン無い？」

「これ？」

「そうそうそれでちょっと切り替え……………」

突如始まった、ゲームのOP。画面一杯のゾンビの顔。

「きゃっ」

「あ、大丈夫!？」

ファーストはびっくりしたのか、ころりと後ろにころがって尻餅をついた。……………今、シンジ君の位置だと下着見えたよね？

「……………びっくりした……………」

「……………も、もー、やっぱりあ、あ、綾波こわいんじゃないかだ、だだだだいじょぶ？」

「いきなりだったから……………びっくりしただけ……………」

ああ僕会話に入れません。僕はあんまり楽しくない。

ちよつとあれかな、ここにいますアピールしたほうがいいかな。

ようしこつなつたら使徒がんばっちゃうぞ！

2 (後書き)

こづはんへ つづく)キータン山田(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9565o/>

wishful thinking

2010年11月17日01時06分発行